

六田晴洋の

私たちの ご近所さん

トガリ
ネズミ
ラウアー


VOL. 40 「夏の景色の向こう側」

お盆が近づくころ、恋問海岸にチョウが飛び交うようになります。海を背景に、花から花へ軽やかに舞う姿は白糠らしい夏の景色です。しかしそれは、彼らの一生のほんの一場面に過ぎません。それまで卵、幼虫、サナギとしてひっそりと過ごした長い時間があります。その過程で多くが命を落とす中、強さと運を持ち合わせた者だけが、今この舞台に立っているのです。

「キアゲハのゆりかご」

チョウの幼虫は食べられる植物が決まっています。それは虫と植物の進化の中で定まった関係。植物は、虫に食べられないよう毒などを身に付け、虫はそれに負けまいと、特定の植物に限り攻略できるようになりました。キアゲハに選ばれてしまったのはセリ科の植物。そのハマ

ボウフウは海岸に群生し、大切なゆりかごとなっています。メスは、卵を産みつけるハマボウフウを入念に選びます。「どれも同じじゃない？」と思うのですが、なかなか降り立ちません。「う〜ん、これもイマイチかなあ」と声が聞こえてきそうなほどです。

「海と山を結ぶチョウ」
恋問海岸には不思議な存在もいます。ミヤマカラスアゲハです。海岸で生まれ育つキアゲハとは違い、ここにはミヤマカラスアゲハの幼虫が食べるミカン科の植物はありません。では、なぜいるのか。

おそらく花を求めて山から飛んで来るのでしょう。海岸に来たら、卵を産みにまた山へ帰らないといけません。花は山にもあるのになぜ…。確かなことは、幼虫が育つ山と、成虫が蜜を吸う海岸、その両方の環境がミヤマカラスアゲハを支えているということなのです。

海岸を舞う一匹のチョウ。その美しさの背景には、人知れず積み重ねてきた時間や営みがあります。そう思うと、いつもの景色に見えない物語が重なってきます。



羽化直後のキアゲハ



山から飛来するミヤマカラスアゲハ

PROFILE

六田晴洋 ろくたはるひろ

1986年生まれ。
2021年に白糠町へ移住。
大学卒業後、フリーランスの
カメラマンやディレクターとして
野生動物や自然風景を撮影している。
<https://rokutaharuhiro.com>

